



①「祝彩の生花」(2016年)…何度も同じ場所に色紙を重ね立体感を出している ②「玉名高瀬花しょうぶまつり」(2015年)…色紙の表面をはいで空の透明感を表現 ③「金閣鹿苑寺」(2010年) ④「行末川から見た風景」(2011年)…細かくちぎった紙で田んぼの稲を表現した通学路の風景



数十種類の色紙を重ね濃淡を表現
①(左)、②(右)の細部拡大

色紙で表現する 01 日常、玉名の風景。

ちぎり絵作家
Name 荒木聖憲さん
アラキミノリ

●1994年岱明町生まれ。2013年荒尾支援学校高等部卒業。
〔受賞歴〕熊本県がんばる高校生(2010・2011)、東京ディズニーリゾート絵はがきコンクールユニーク賞(2012)、愛鳥週間用ポスター原画コンクール金賞(2012)、優秀芸術文化賞(2012)



「ちぎり絵の世界。ちぎった色とりどりの色紙を、ひとつひとつ貼りあわせて描く、ちぎり絵の世界。」

岱明町に住む荒木聖憲さん(22)のちぎり絵は、多彩で、細やかな濃淡が素晴らしく、見る人が思わず触ってみたくなるほど繊細なもの。間近で見ると、写真や絵画だと思える。荒木さんは、中学2年の時に裸の大将として有名な山下清の作品に触発され、身近な風景を題材にちぎり絵の制作を始めました。働いている今も、平日は4、5時間、休日は10時間ほど制作に打ち込んでいます。一作品完成させるのに5カ月かかることもありすが、これまで完成させた作品は90点以上。ちぎり絵は独学で、極細のこよりを使うなど表現したいもの

に合わせて技法を考えていきます。1年前からは、風景画では使わない色や表現に挑戦しようと抽象画に取り組み、静物画の背景①にそのデザインが生かされることも。作品はこれまでに県立美術館分館、こころピア、カフェギャラリーなどで展示され、多くの観客の感嘆の声を集めてきました。

荒木さんは幼い頃に軽度の自閉症との診断を受けています。強いこだわりや自分なりのルールなどで生活のしづらさを感じることがありますが、ちぎり絵の制作に高い集中力、細部へのこだわりを発揮できたりと、障がいというより自分の特性の一つと捉えています。

日頃からカメラを持ち歩き、気に入った風景は作品の参考に。あなたの身近な風景も、いつか荒木さんのちぎり絵の題材になるかもしれません。

ちぎった色とりどりの色紙を、ひとつひとつ貼りあわせて描く、ちぎり絵の世界。」

岱明町に住む荒木聖憲さん(22)のちぎり絵は、多彩で、細やかな濃淡が素晴らしく、見る人が思わず触ってみたくなるほど繊細なもの。間近で見ると、写真や絵画だと思える。荒木さんは、中学2年の時に裸の大将として有名な山下清の作品に触発され、身近な風景を題材にちぎり絵の制作を始めました。働いている今も、平日は4、5時間、休日は10時間ほど制作に打ち込んでいます。一作品完成させるのに5カ月かかることもありすが、これまで完成させた作品は90点以上。ちぎり絵は独学で、極細のこよりを使うなど表現したいもの

に合わせて技法を考えていきます。1年前からは、風景画では使わない色や表現に挑戦しようと抽象画に取り組み、静物画の背景①にそのデザインが生かされることも。作品はこれまでに県立美術館分館、こころピア、カフェギャラリーなどで展示され、多くの観客の感嘆の声を集めてきました。

荒木さんは幼い頃に軽度の自閉症との診断を受けています。強いこだわりや自分なりのルールなどで生活のしづらさを感じることがありますが、ちぎり絵の制作に高い集中力、細部へのこだわりを発揮できたりと、障がいというより自分の特性の一つと捉えています。

日頃からカメラを持ち歩き、気に入った風景は作品の参考に。あなたの身近な風景も、いつか荒木さんのちぎり絵の題材になるかもしれません。